

千葉市美術館  
アーティストプロジェクト  
報告書

つくりかけラボ02  
志村信裕 | 影を投げる

会期

2021年  
1月5日(火) - 4月4日(日)

アーティスト

志村信裕

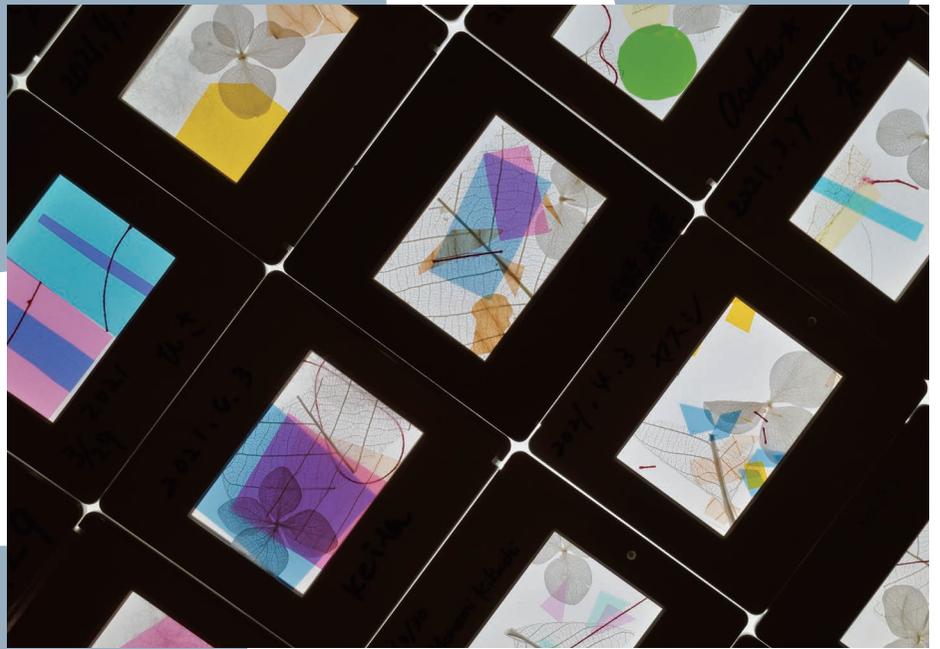
テーマ

五感でたのしむ

概要

「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。

第二回は、日用品や動物など身近なものをモチーフに、自らの視点で過去を探る映像作品を制作する、千葉県在住の美術家・志村信裕さんを迎えました。「影を投げる」と題した会場では、視覚にとどまらない鑑賞体験を通し、訪れた人々が空間を能動的に楽しむことのできる実験的な場が創出されました。



撮影：丸尾隆一

# 志村信裕 影を投げる



## 投げ合う影の行く末

玉ねぎの皮、ガーゼや綿、葉脈標本にカラーセロハンなど、身近な素材をスライドに挟み込み、投影機を用いて壁に映し出す。光を透過させ、実物の何十倍もの大きさで投影された像は、微細な繊維の形状が露わになったり、色彩がモノクロに変化したりと、手元の小さなスライドから思い浮かべるイメージとは大きく異なる姿を現した。

この「ダイレクト・プロジェクション」という手法は、教育者でもあった美術家のブルーノ・ムナリ（1907-1998）の実践を参照した志村が、来場者に映像の「手触り」を体験してもらうことを狙いに取り入れたものだ。作家が不在の間にも、様々な来場者の参加を経て、空間は少しずつ変化していく。今ここで出会う人だけでなく、かつてこの場を訪れた人びと、これから訪れるであろう人びとの存在／不在を想像し、それに呼応するように、志村は新たな映像作品の制作、スライドの入れ替えや会場の再構成など、独自の実験を重ねていった。このまるで、イメージの交換日記のようなやりとりを通して、直接的な接触が困難とされる状況においても、作家と来場者との間には、時間をかけて育まれる関係性を見出すことができたように思う。

リストに沿って作品が展示され、タイトルや制作年が明示されている展覧会とは異なり、つくりかけラボでは、「体験を通して空間全体を楽しむ」という趣旨が示され、この場との関わり方を、来場者自らが自発的に見つけ出すことが促される。プロジェクションされた映像をじっくり鑑賞する人もいれば、暗くて広い空間を走り回って楽しむ子ども、作家とのコミュニケーションを深める中高生と、時間の過ごし方は三者三様であった。

会場を仕切る壁に作り付けた棚の中には、過去の展覧会図録、美術に関する書籍や雑誌、8ミリフィルムカメラなどの機材、持ち手のついた陶器のカップや、表面がすべすべとした拳大の丸い石まで、様々な物がレイアウトされていた。自宅の一角を切り取ったようなたたずまいからは、作家の仕事や生活が垣間見えるようで、来場者が興味を惹かれたものをきっかけに対話が始まる場面も少なくなかったという。

企画者としては、この遠回りのような歩みを経て、作家の経験や思考の拡がり、次なる表現を展開させる上での糧ともなることを願っている一方で、具体的な「作品」としては結実しないかもしれない「つくりかけラボ」という時間や出来事をどのように記録し、後の時代に引き継いでいくことができるのか。多様な人々の体験や想いの降り積もる場所としての美術館自らが媒体となることを引き受け、考え続けなければならない課題である。

（千葉県美術館学芸員 畑井 恵）

## #見る



志村さんの滞在制作を通して、会場に投影される映像作品が変わっていききました。撮り方や素材、機材や撮影者も様々な映像が同時に見られる空間では、身体を動かしながら楽しんだり、衣服に光を写して捕まえたり、床に座ってじっくり鑑賞したりと、その場を訪れた方々が各々に時間の過ごし方を見つけてくれました。



## #投げる



身近な素材を使ってスライドを手づくりし、その場で投影するダイレクト・プロジェクションのワークショップを、来場者がいつでも参加できる形で開催しました。会期中957人が参加、志村さんの手元には350個のスライドが届けられました。

※感染症対策のため、会場内でのスライド制作体験は時間制限を設けて実施するとともに、「スライド制作キット」の配布を行いました。

8ミリフィルムでの撮影ワークショップ「影を撮る」を開催。1月16日 [土]、1月30日 [土]、2月13日 [土]、各回3名ずつという限定的なワークショップでしたが、5歳のお子さんから中高生、親子連れと、幅広い年代の方にご参加いただきました。会期後半には、撮影したフィルムを元に志村さんによって編集された映像が会場に投影され、素敵な空間が出来上がりました。



## #撮る

会期中の週末を中心に会場に滞在し、作品制作や実験に勤しむ志村さん。展示中の映像やアーティストとしての生活についてなど、来場者の方々からの質問に答えながら、和やかにお話しされる姿が印象的でした。そんな志村さんと話したくて繰り返し訪れてくださる方も多く、コミュニケーションの場が自然とつくられていきました。

## #出会う



## #考える

「影を投げる」の構想から、会期中に志村さんが考えたこと、来場者の方々から寄せられた言葉や企画者の思いなど、プロジェクトを通して起こった様々な動きを捉え発信するリーフレットとして、「つくりかけジャーナル」1～3号を発行しました。



1号



2号



3号

【編集・執筆：中田一会（きてん企画室）、撮影：丸尾隆一、1号デザイン：加藤賢策（LABORATORIES）、2・3号デザイン：上田美里】

会期終盤には、建築家の佐藤慎也さんを迎えて対談を行い、つくりかけラボでの活動を振り返りながら、志村さんの制作活動の新たな可能性について思いを巡らせた。

# プロジェクト空間をどうつくるか インスタレーションの新しい種。

「つくりかけラボ02」志村信裕「影を投げる」関連トーク

会期終盤、建築家の佐藤慎也さんを迎えて対談を行いました。つくりかけラボでの活動を振り返りながら、佐藤さんが2021年度から館長を務める八戸市美術館との共通点や、志村さんの制作活動の新たな可能性について、担当学芸員を交えて語り合いました。

## 変わっていく美術を受け止めていく美術館に

**志村** 2019年に「つくりかけラボ」についての話をいただいたときに、外からの要請ではなく、美術館の内側から変えようとしているのが新しいなってまず思いました。それも単発の企画ではなく通年で決まっています、いろいろなアーティストにバトンタッチしながら、美術館やアーティストの役割が変わっていく予感がしました。

**畑井** アーティストの創作や表現は常に予想もできないところに行くので、美術館はいつもその後追いだと私は思っています。歴史化されたものを変えないように保存する施設でありながら、展覧会など様々な事業や人との関わりを通して、少しずつ変わっていくものではないかと。

**佐藤** 美術館では、若手作家は個展では取り上げられにくいけれど、教育普及の枠であれば企画が通りやすいという側面がありますね。現代作家が美術館の中で活動を行う入口のひとつになっているのではないですか？

**畑井** そうですね。新しくなっていく表現をどう捕まえられるか、その際にプロジェクトの場所や時間軸などさまざまな関係性の扱い方を考えるときに、教育普及という枠組みはちょっとした柔らかさ、フットワークの軽さはあると感じています。

**佐藤** つくらボの活動は、僕自身が国内外の美術館をリサーチしてきて八戸市美術館で考えようとしているところとかなり重なっていますよ。八戸市美術館は

2021年3月27日  
千葉市美術館 会議室（非公開）

志村信裕  
現代美術家

佐藤慎也  
建築家  
日本大学理工学部建築学科教授  
八戸市美術館館長

進行  
畑井恵  
千葉市美術館学芸員

まず、熊倉純子先生（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）たちを中心に、作品を展示して見せるだけではない、アートプロジェクトをつくるような美術館のあり方が構想されていました。その後に僕自身は、2016年に八戸高専で建築を教えている大学の後輩から講演を依頼されて接点ができました。2011年に八戸ポータルミュージアム「はっち」が開館し、2020年に弘前れんが倉庫美術館ができる予定があったし、美術が変わってきているのに対して、それを受け止める美術館が必要だろうと考えていたときだった。それから八戸市美術館のプロポーザル審査に加わって建築プランを選び、運営検討委員会に参加していたら急に館長の話が舞い込んできたわけなんです。

八戸市美術館には、つくらボを巨大化したようなジャイアントルームという大空間ができます。カーテンで仕切ると部屋っぽくなるし、可動式の収納や家具もあります。（図を見せながら）

**志村** 天井高18メートル！

**佐藤** ワンフロアにあるので、ジャイアントルームで行われているプロジェクトがメインの展示のようにも見えるし、奥のホワイトキューブという展示室で開催される展覧会とジャイアントルームの活動がどう関係するのか／しないのか、11月のオープンに向けていろいろな可能性を考えていて。

**畑井** すごく面白そう！コロナ禍による社会変動があり、展覧会ができなくなっても教育普及事業としてだったらこれができるといった、何がどうなるのかわからないときに、どこが表で裏かわからない構造で美術館をつくっていかうとしている考え自体に興奮します。

**佐藤** アートプロジェクトってある意味では演劇寄りだと思うんです。ものの美術は観客が変わっても作品が変わらないけど、パフォーマンスは観客が変わると作品が変わる。いわゆる普通のライブでも観客のノリが変われば出来が変わることがあるように、アートプロジェクトも参加する人が変われば作品は変わる。今回の志村さんのプロジェクトで参加者がつくるスライドも、来てくれる人たちが違えば違うものができると考えたときに、やはり演劇に近いような感じを受けました。つくらボの3ヶ月間は、演劇でいうと稽古みたいな期間というのかな。ジャイアントルームの中でも、そういう演劇の稽古的な時間と場所をつくる可能性はないかなと考えています。

**志村** 演劇でも稽古を見せることってありますね。

**佐藤** とはいえ稽古って、最後にできたものが作品であるだろう、という前提があって。理想的には、展覧会の前にジャイアントルームでつくる時間があって、そこから展覧会になるみたいな。ジャイアントルームからホワイトキューブに移っていくという時間の流れの可能性もあるのかなと考えていますね。

## 活動をどうアーカイブする？

**佐藤** アーティストたちはいわゆる自分の作品をつくることと、つくらボのような活動をどう分けているのか、分けていないのか興味があります。志村さんはどうですか？

**志村** 作家としての視点でワークショップを開催しているので、予定調和じゃないことがやりたい。アーティストの山本高之さんが「ワークショップも作品だ」って言っていて「そうだよな、そう言っていていいよな」って思ったことがあって。ただし展覧会や作品の批評は書かれるんですけど、ワークショップって批評言語があまりない。つくらボで今回やろうとしていることも実験的で面白いんですけど、テキストでは批評されづらいのかなと思いました。

**佐藤** その批評しづらいところを言語化する必要がある？

**志村** そうですね、だからこそ価値があるというか。展覧会での発表とは違うことを求められるけど、作家のアウトプットのひとつとして価値をおきたい。

**佐藤** 美術館って、良くも悪くも制度になっていく部

分があったり、そこで展示や収蔵されると権威みたいになっていたり、何をしてもそういったものから逃れにくいところだなと思うこともある。一方でアートプロジェクトにずっと関わっていくと何も残らないから、活動を残すためには、作品として保存したり、未来に再現可能にしたりといったことを考えないといけないのかなと。だから八戸市美術館でプロジェクト型作品をやるのであれば、ある部分が収蔵されていく必要があるだろうとは思っているんです。映像に残すことも含めて。そこを考えることで教育普及ともまた違う、美術館にとっての価値にならないか。志村さんは今回の何をどう残すか考えている？

**志村** どう残すか……。

**佐藤** 例えば5年後に何らかの形で展示する可能性があるかもしれない。同じことをそこにいる参加者とつくとワークショップに近いけれど、あるいは今回のここで起こった出来事を再展示、再演するといったことをどう考えるか。

**志村** 会期中、どういう時間を一緒に体験し共有できるかに重きを置いていて、残すところまで考えていませんでした。

**佐藤** その充実度って測定しづらいもので、集客数の多さやスライドの数で成功でもないし。種を蒔く行為というか、何が花開くのかすぐにはわからないですよ。今回つくられたスライドなどは何らかの形で保管しておく？

**志村** 大事なポイントですね。考えていくと、作品とは何かということまでいくかもしれない。

**畑井** 参加人数が少なくても、ある人にとっては人生が変わるかもしれないという変化までを追うとしたらどこまで評価できるか。作品という括弧つきで残す／残さないまで踏み込んで考えないといけないんだなってハッとしました。

**佐藤** ジャイアントルームの場合でも、人が活動している状態もある種の展示なんですよ。エッセンスなのか記録なのか何かが常設されていないことには、特に遠方から一時的に来る人にはイメージできないんじゃないかな、ということも考えていて。何を常設するのかって考えると、残す／残さないを考えるひとつのポイントになるかな。

**志村** 今回は、何か展覧会って言いたくないっていう部分が僕の中にありますね。

**佐藤** なぜ展覧会って呼びたくないのでしょうか？

**志村** 展覧会って、自分にとってはやっぱりフィックスされたものなんですよ。プランを立てて、現実的な問題を解決して実現させたっていうところまでが作品だと思っし、一回フィックスしたらなるべく動かさないのがベスト。今回は、途中で変わってもいいことが前提なので、展覧会と言わない方が自然かなって、そう思いました。

**佐藤** 先ほど「ワークショップは作品と呼べる」ということだったけど、作品と展覧会はどういう関係性にありますか？

**志村** 作品は、一瞬でも作品になり得る、たとえ残らなくても。演劇もそうですけど。だから作品は自分にとって手法というか、人とコミュニケーションできる手法だと捉えています。展覧会は完成されたパッケージというのかな。何か意識が違うんですよ。

**佐藤** なるほど。じゃあ、つくラボは志村さんのには、一般的な用語で呼ぶとすれば、何？

**志村** プロジェクトですかね。便利な言葉かもしれないですけど。

**佐藤** 僕も今ある言葉で言えばプロジェクトなのかなあと思うんだけど。

## アーティストも鑑賞者もともに活動できる空間づくり

**志村** これまでの経験値として、ワークショップでつくられた作品だけでは（つくラボの）130平方メートルある部屋は埋まらないというのはわかるんですよ。間が持たないというか。それで自分の作品と、ラボでつくってもらった作品を混ぜているんですけど。

**佐藤** その作業する場所を思いきりつくり込んでいるんですね。

**志村** それも込みのプロジェクトなのかなって。週末にはリアルな作家がそこにいるっていう。

**佐藤** あのアトリエのスペースのつくり込み方は見事だな。ちゃんとコントロールしてつくっているからプロジェクトって呼べる。ワークショップと呼ぶ人はワークできればいいわけだから備品を借りてやればいいはずだけど、志村さんは空間まである意味インスタレーションとしてつくり込んで、そこに来る人たちがその空間の中で作業するところまで考えている。

**志村** 今の言葉でハッとしたんですけど、インスタレーションの延長でつくっているのかもしれないです。意識してなかったかもしれないですけど。

**佐藤** 言い方が悪いかもしれませんが、映像より、手前の空間の方が今回の新作っていう感じがしたな。

**志村** 企画書とは別に、作業する部屋と、映像を上映する部屋のドローイングを2枚つくって、上映する部屋はガラス張りのところから小さな子が覗けるようにしたいと畑井さんに話しました。3ヶ月毎に作家が変わって、空間もガラッと変わるという要請を受けていたので、まず空間づくりが腕の見せ所というか、その作家が何を大事にしているか、何を見せたいのかということが問われているのかなと思いましたね。

**畑井** 志村さんはほぼ毎週末滞在してくださって、来場者が作品だけでなく、それを表現しているアーティストと出会って関係性を築いていく。実際、あるお子さんが1・2回目はお母さんと一緒に来て、3回目には自分の意思でお父さんを連れてきてくれたんです。そんなふうに住わじわ伝わるのもいいなと思いました。来場者の振る舞いや言葉にアーティスト側も何かしら影響を受けて、空間が変わっていくのが面白いですね。

**佐藤** 出会いのあるプログラムというのはどうですか？

**志村** 面白いです。靴を脱ぐからなのか、空間自体の質からなのか、子どもが映像の前で踊ったり側転したりするんですよ。企画展示室ではこうは動かない、こんな体験の仕方があったんだという発見がいくつもありました。

**佐藤** 展覧会ではあまり見ることのない、鑑賞する人をじっくり見る機会でもあった？

**志村** そうですね、例えばボタンや金魚をモチーフにした10年前の映像作品も映しているんですけど、自分

の作品のあり方とかまだまだ開発する余地があったんだなって気づいたり。展覧会であればひとつの空間にプロジェクターを5つも設置して、導線がなく視点もひとつだけじゃない見せ方は絶対にしない。けれども今回はラボ（実験室）なので、自分がつくったものと参加者がつくったものをヒエラルキーなく並べたいなと思って。相互作用が求められる企画なんですけど、インタラクションじゃなくてインタープレイなんですよ、どうやって来場者と関係を結ぶのか。年代やどこから来たかも違う人々の反応がそれぞれ違って面白。スライドを自分もつくることで、何が他の人と違うんだろうかという視点も生まれるでしょうし。

**佐藤** 映像と同様に、そこでつくったスライドが並列に来る（上映される）体験って面白い。

**志村** だから作品にキャプションもつけなかったんですよ。たぶん小さな子どもは同じように見えて、そのくらい自由な見方の方が面白い。とはいえ、スタッフの方は、ある種ファシリテーターのようにお客さんに合わせてナビゲートしてくださっています。僕がいるときは、向こうから質問してくれることもあれば、僕から話しかけたり。手前のアトリエのところに置いてあるカメラから対話のコミュニケーションが生まれたり。

**佐藤** そこにアーティストがいることの意味が考えられる気がするな。

**畑井** 美術ってわからない、知識や背景などたくさん情報に裏付けられたとしても、すべてが「わかった!」とまでにはならないもので、だからこそ意味があるのだと提示していくものだと思います。わからないにどう寄り添えるか、寄り添い方の手つきを一緒に考えていくのが教育普及じゃないかと思うんです。学芸員も答えを持っているわけじゃなくて、他者の表現って突き詰めるとやはりどうしてもわかり得ないかもしれない。でもその場に一緒に入ってみようという体験がつくラボではできるのではないかと思っています。

## 部室のような、子どもたちが訪れやすい場所に

**佐藤** フランスでのレジデンスを経て変化はありましたか？

**志村** ええ。印象的だったのは、子どもの頃から美術館でキュレーターの話聞いて作品を見るという土壌ができてるのが羨ましかった! 2年間の滞在で良い

ものを沢山見ることができたので、自分の経験を還元するとしたら、子どもたちに伝える仕事もあるんじゃないかと思うようになりました。つくラボみたいに、美術館と協働して美術に慣れてもらう機会をつくるのが大事だと思っています。

**佐藤** そう、ヨーロッパではみな美術館に慣れてるよね。震災直後に、豊島区にあるコミュニティーセンターで演劇のプロジェクトがあったんですけど、この会議室をどう居心地良くするか考えるにはまず「いる」ことが大事だって、2、3時間寝転がったり座ったりして時間を過ごすことが稽古だったんです。役者たちは時間をかけることによって見えてくるものを大事にしている。人が長時間活動するために居心地がどう繋がっていくか。つくラボで「靴を脱ぐ」というアクションもそのひとつかもしれない。

**志村** 部室みたいになったら良いなって思っていて。小さい子だけでなく、中学生や高校生にとっても学校以外に集まれる場所になったらなって。

**佐藤** 3ヶ月おきに部長が変わる（笑）。3ヶ月という期間はどうでしたか？

**志村** 期間が長いからこそできることもあるなあと思いました。他の美術館の教育普及の方も来てくださったのですが、コロナ禍での活動のヒントを求めているように思いました。

**畑井** コロナ禍でもやれることを一緒に探ることができた。やるかやらないかだけでなく、今ならこれはできるなって考えながら変えていけたのは、運営側としても良かったです。

**佐藤** 美術館にこうして蓄積されてくると、本や映像以外にもクリエイティブなドキュメントの可能性がありそうですね。

**志村** 映像や活動を見せる空間をどうつくるか、活動をどう残すか。新たな課題をいただけてお話しできて良かったです。

**畑井** 私もアーティストも教育普及される側になると思っているんです。美術館に来た小学生から10年後に変化が戻って来るかもしれないし。学芸員も作家も鑑賞者もお互いに時間をかけて影響し合う場ができていたのかもしれない、それこそ美術館なんだと思いをあらたにしました。

### 志村信裕

しむら・のぶひろ

現代美術家。1982年東京都生まれ。現在は千葉県を拠点に活動。2007年武蔵野美術大学大学院映像コース修了。2016年から2018年まで文化庁新進芸術家海外研修制度により、フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）の客員研究員としてパリに滞在。近年の展示に「生命の庭-8人の現代作家が見つけた小宇宙」（東京都庭園美術館、2020年）、「志村信裕 残照」（千葉県立美術館、2019年）<https://www.nshimu.com>

### 佐藤慎也

さとう・しんや

建築家、日本大学理工学部建築学科教授、2021年4月、八戸市美術館館長に就任。1968年東京都生まれ。1994年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。アートプロジェクトの構造設計、ツアー型作品の制作協力、まちなか演劇作品のドラマトウルクなど、建築と美術、演劇の空間について研究・計画・設計を行う。「アーツ千代田3331」改修設計（2010年）、「アトレウス家シリーズ」（2010年～）、「としまアートステーション構想」策定メンバー（2011～17年）、「みんなの楽屋」（あわい～、2017年、TURN フェス2）、「東京プロジェクトスタディ」ナビゲーター（2018～21年）など。

**つくりかけラボ02**  
**志村信裕 | 影を投げる**

**会期**  
2021年1月5日(火) - 4月4日(日)

**企画**  
畑井 恵

**ワークショップ運営**  
田口由佳  
上田美里

**ワークショップ運営補助**  
柏原理乃  
相川佳菜子  
海竇眞生  
顧 可  
奥村 裕  
降矢恵里  
井吉紀子

**グラフィックデザイン**  
加藤賢策 (LABORATORIES)

**会場施工**  
TRNK

**会場案内デザイン**  
上田美里

**来場者数**  
2,399人  
(大人1,874人、中学生以下525人)

**主催**  
千葉市美術館

**「つくりかけラボ02**  
**志村信裕 | 影を投げる」報告書**

**編集・執筆**  
畑井 恵

**トーク編集・執筆 (pp.4-7)**  
白坂由里

**編集協力**  
中田一会 (きてん企画室)

**写真撮影**  
丸尾隆一

**デザイン**  
加藤賢策 (LABORATORIES)

**印刷**  
株式会社エイチケイ グラフィックス

**発行**  
千葉市美術館  
〒260-0013  
千葉県千葉市中央区中央3-10-8

**発行日**  
2021年7月14日

